

21 一つの世のふもとの塵ちりかふじのねを雪ゆきさへ高き山えたか やまとなしけん

あぶつに
阿仏尼

【歌意】

いつの時代のふもとの塵だろうか。それが積もり積もって、富士山を、雪を頂くまでの高い山としたのは。

〈鑑賞〉

まさに「塵も積もれば山となる」です。雪を戴く三千七百七十六メートルの富士山の大きさになるのはどれほどの土や塵が必要だったのでしょうか。作者の日記によれば、この歌は『古今和歌集』の序文の表現を踏まえて作ったものです。「塵」という小さなものと対比することによって、富士山の高さを強調しています。

22 ふじのねをふりさけみれば白雲しらくもの尾花おはなにつづくむさし野のの原はら

ふじわらのながひで
藤原長秀

【歌意】

富士山を振り返って見てみると、そこにかかる白い雲のような薄すすきの穂が一面に広がっている武蔵野原の光景だなあ。

〈鑑賞〉

武蔵野は今の東京の郊外です。そこから富士山を眺めると、当時は、目に真つ白な薄の穂が広がっていたのでしょうか。今も東京などには多くの「富士見」という地名が残されています。

23 見^みせばやな語^{かた}らばや^はらに^{およ}「この葉^{ふじ}も及^{たかね}ばぬ不二の高根なりけり

むねよしんのう
宗良親王

【歌意】 見せたいな、話したとしてもとても言葉では表しきれないほどすばらしい、富士山の姿だなあ。

〈鑑賞〉 富士山の美しさは言葉では伝えられません。当時の都の人にとって、富士山は歌に詠むもので、実際に見たことがある人は少なかったのかもしれませんが。作者は後醍醐天皇の第五皇子。千三百三十四年に安倍城に到着し、約一年この地で過ごししました。

24 紅葉^{もみじ}する富士^{ふじ}のしばやま^{あき}がれてや秋^ひのやく火^{けむり}の煙なるらん

そうぎ
宗祇

【歌意】 富士山が紅葉に包まれて、山に生える小さな木々が焦げているのだろうか。秋にはそれが煙となって立ち上っているのだろうか。

〈鑑賞〉 紅葉に包まれた富士山。その紅葉の真っ赤な火によって、木々が燃え、富士山の煙になっているのだろうか、と詠む一首です。作者は室町時代の連歌師です。

25 わが庵^{いお}は松原^{まつばら}つづき海^{うみ}近く不二^{ふじ}の高根^{たかね}を軒端^{のきば}にぞ見る^み

おおたどうかん
太田道灌

【歌意】 私の住む家は、松原が続く海の近くで、富士山の頂が軒の先に見えるよ。

〈鑑賞〉 この歌の作者は江戸城を築いた人です。和歌にも武道にも優れた人として知られています。「私の住む家は松原が続く海の近くで、富士山の頂が軒先に見られる」というとても幸せな一首です。

26

たちならふ山ぶやまこそなけれ秋津すや我日本あきつのふしの高ねにわがひのもと

じ たか

水戸光圀 みとみつくに

【歌意】

高さを競いあうような山々もない、この日本国の富士の山には。

〈鑑賞〉

作者は御存知、水戸黄門の光圀公です。多くの歌を詠み、この歌の他にも富士山を詠んでいます。並んで立つような山は二つとない富士山の高さ。「秋津す（洲）」も日本をあらわす言葉です。

27

ふじのねにむかし昔くだりし天少女あまおとめふりけむ袖やいまの白雪んそで

しらゆき

契沖 けいちゅう

【歌意】

富士山に昔、天女が降りてきてその羽衣の袖を振ったそうなの。その袖が今、降り積もった雪になっているのだろうか。

〈鑑賞〉

羽衣伝説では三保の松原が有名ですが、富士山に不老不死の薬を探しに来た者が天女に出会ったという謡曲もあります。作者は、富士山を多く詠んだ江戸時代の国学者です。

するが ふじ たかね ず おと くも うえ み
駿河なる富士の高根はいかづちの音する雲の上にこそ見れ

かものまぶち
賀茂真淵

【歌意】

駿河の国にある富士山の山頂は、雷の音がするその雲上に見える。

〈鑑賞〉

「♪あーたまーをくーもーのーうーえにーだしー（頭を雲の上に出し）」

という童謡「富士山」を思い出す一首です。北斎の浮世絵にも雷が山裾に光っている絵があります。作者も江戸時代の国学者。荷田春満・平田篤胤らとともに「国学の四大人」と称えられた人で、現在、浜松市に賀茂馬淵記念館があります。

くも たえま み あずまじ そら
ふじのねは雲の絶間に見えそめていくかになりぬ東路の空

もとおりのりなが
本居宣長

【歌意】

富士山は雲の切れ目に初めて見て、それからいく日になったのだろうか、この東への旅の空は。

〈鑑賞〉

雲の切れ目にちらつと見えて、それから富士山とともに旅をしています。

見える日もあり、見えない日もあり。幾日かけてどれほどの距離を、富士を仰ぎながら歩いたのでしょうか。作者も二十八番の作者同様、「国学の四大人」と称された一人です。この時代の医師でもありました。

いおはら

きよみ

あさ

ふじ

あき

み

庵原の清見がさきに朝はれて富士は秋こそ見るべかりけれ

うえだあきなり

上田秋成

【歌意】

庵原の清見が崎の朝、晴天となった。富士山は秋こそ見るものなのだなあ。

〈鑑賞〉

「清見がさき」は興津の清見寺のあるあたりで、県内でも有名な「歌枕」です。清見が崎に居た朝、富士山は秋こそ見るべきものなのだ、と詠んだ一首です。